

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	九州大学	拠点番号	D 1 3
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称 (英訳名)	東アジアと日本：交流と変容 (East Asia and Japan: Interaction and transformations)		
研究分野及びキーワード	＜研究分野： 史学 ＞(文化交流史) (比較歴史学) (先史学)(史料学)(文献学)		
専攻等名	比較社会文化学府日本社会文化専攻、比較社会文化学府国際社会文化専攻、人文科学府歴史空間論専攻、人文科学府言語・文学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 今西 裕一郎 教授 他 15名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

＜本拠点がカバーする学問分野について＞

東アジア諸社会における交流、および日本と東アジア諸社会との交流を通して社会文化の変容が引き起こされたという歴史的展開を、東アジア諸社会間の〈交流〉と、〈アイデンティティの形成・変容〉をキーワードとして、日本史、東洋史、朝鮮史、考古学、日本語学・文学等の学際的共同研究によって解明し、日本の新たなアイデンティティの模索と確立に寄与する。

＜本拠点の特色及びその目的等＞

アジア／日本の新たなアイデンティティの在処を得て、視野の広い「アジア専門人」を養成するため、アジアに隣接する地の利を有する九州大学の歴史学分野の研究者を結集し、東アジア／日本の諸地域・社会集団を、個々の孤立した対象としてではなく、交流によって歴史を織りなす動的な諸地域・社会集団として捉え、それぞれの社会および集団・個人の意識あるいは暗黙知レベルでの変容過程まで考慮しながら解明して九州大学ならではの個性的な〈アジア学〉の拠点を形成する。

＜COEを目指すユニーク性＞

アジア／日本社会のアイデンティティを固定的に捉えるのではなく、その形成過程を歴史的・動的に捉えることによって、より柔軟なアジア理解のスタンスを得る。また、個別分野ではなく、歴史学各分野が共同して複眼的に研究教育を行うことによって、より広い視野と多様な方法・感性を持った人材を養成できる。日本のアイデンティティを主題とした組織としては日本文化研究センターがあるが、本プログラムはアジアとの交流においてアイデンティティの形成過程を捉えようとしており、スタンスが異なる。

＜本拠点のCOEとしての重要性・発展性＞

国家レベルから個人レベルまで、日本と日本人の歴史認識はアジアの中で常に注視されているが、卑屈でも不遜でもないニュートラルな歴史認識を持ち、アジアにおける歴史認識の形成過程に対する深い理解を得ることで、新たなアジアと日本、アジア諸国間に対するスタンスを得ることができる。このような知の集積は、アジアの中での国際人として日本人が活動するために不可欠であり、今後さらに重要性を増すことから、本拠点は重要でありかつ発展性を有する。

＜本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果＞

本プログラムは、九州大学の歴史学諸分野の教員・院生が合同で行うため、先史時代から近現代までのアジア／日本の歴史過程における交流とそれが及ぼした制度や意識の変容を詳細に解明し、アジア諸社会におけるアイデンティティ形成過程の概要を得ることができる。また、そのための複眼的・学際的視野に立った研究法の確立が期待される。

＜背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等＞

本プログラムが扱う主題はナショナリズムと結合しやすく、アジア諸国における研究もその例外ではない。その中で客観的方法によって事実を集積しニュートラルな歴史像と認識を提供することは、アジア／日本の新たな歴史認識を生成し、新たな関係の基礎を提供することと考える。

機 関 名	九州大学	拠点番号	D 1 3
拠点のプログラム名称	東アジアと日本：交流と変容		

◇ 2 1 世紀 C O E プログラム委員会における評価

（総括評価）

現在までの進捗状況等に鑑み、今後の努力を待っても当初目的の達成は困難と思われるので、拠点形成を継続するためには、下記のコメントに沿って、当初目的を絞り込んだ上で当初計画を大幅に縮小することが必要と判断される。

（コメント）

本プログラムは、九州という立地条件を生かして、東アジア諸社会における交流、及び東アジアと日本との交流によって生じた社会文化の変容とその解明に着目したプログラムとして、これまでの研究実績と地域性の利点を生かした成果を期待されていた。しかしながら、これまでの進捗状況を確認したところ、当初の期待と現在の状況との間に大きな隔たりがあると判断した。本プログラムの目標を達成するために研究計画が示されているが、ヒアリングにおいて、各事業推進担当者の研究実績の面では過去の業績に依存している報告が目立ち、世界的な拠点形成という目標及び計画を十分に意識した研究を行ってきたと判断することはできなかった。また、個々の研究者は、それぞれの分野において活躍が見られるものの、本プログラムの趣旨が各事業推進担当者に徹底しているとは言い難く、さらに、複数の研究科を「交流と変容」の大きなテーマの下に無理に組織した結果、有機的な連携を欠き、統一性がとれていないと判断した。なお、一部の設備備品については、拠点形成という目標のための活動との整合性について十分に示していただけなかった。

これらの諸点を勘案すると、当初の計画遂行は予想以上に困難であり、現状では、今後2年間で当初の目的を達成することは難しいと判断せざるを得なかった。

以上の評価を貴大学に示したところ、貴大学からは大幅に絞り込んだ修正計画案が提出された。その内容は、学長の強いリーダーシップのもとで、①従来の3つの研究ユニットを1つに絞り比較社会史研究に集中する、②東アジア諸国家の形成過程の比較研究、及び東アジアにおける内陸圏と海域圏という2つの位相という視点からの比較社会史研究を行うことを骨子とするものであった。

この計画案について、調整部会において慎重に審議検討した結果、今後2年間で達成することが概ね期待できると認められ、拠点形成を継続することが妥当と判断した。

なお、継続にあたっては、研究の焦点を大幅に絞り込んだ修正計画案にふさわしい副題を付していただきたい。また、拠点形成計画が適切かつ着実に遂行されるよう、1年後に調整部会において進捗状況について確認することとする。